「喜びが満ちあふれるために」
ヨハネによる福音書 17 章 1-19 節

ヨハネによる福音書は 17 章において、イエスさまが十字架の死を前にして、後に残る弟子たちのために捧げられたとりなしの祈りが記されています。

この祈りの冒頭においてイエスさまは、「父よ、時が来ました」(1)と言われています。ヨハネによる福音書では、カナの婚礼の時からイエスさまは、度々「わたしの時はまだ来ていません」と語られていました。しかし、ここにおいてイエスさまははっきりと「時が来た」と宣言しておられます。つまり、主イエス・キリストの生涯の目的である使命を達成する時が来たというのです。その使命というのは、すべての人に「永遠の命を与える」ということです。そのためには、神さまと人間との交わりを隔てている罪を取り除き、神の愛と命と力が、再び人間に注がれる交わりの回復が必要となります。このために、イエス・キリストは天からこの地上に下り、私たちのところに来て下さったのです。そして今や、私たちが父なる神のもとへ立ち帰る道を開くために、キリストが地上から天に帰る、その時が来たのです。

それからイエスさまは、後に残る弟子たちのために祈られました。「わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」(11)。「わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」(14-15)。

イエスさまは、御自身が十字架にかけられて世を去ることを知っておられました。また、残された弟子たちが困難な状況に陥ることも知っておられました。だからイエスさまは、ご自身が世を去られた後、弟子たちが守られるようにと、父なる神さまに祈られたのです。

では、何から守られるようにと祈られたのでしょうか。「悪い者」からです。ここで言われる悪い者とは、悪魔・サタンと考えて良いと思います。私たちをイエス・キリストの救いから離れさせようとする一切の悪しき力です。私たちは絶えずこの悪しき力に脅かされているのです。イエス・キリストの弟子としてこの世を生きるには苦しみが伴います。そんな時、私たちは、どうしても楽な方を選んでしまいがちです。なにしろあの預言者エリヤですら、不信仰の時代の中で信仰の戦いに疲れ果て「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」(列王上 19:4)と祈るほどだったのです。

しかし、イエスさまは、私たちのためにこう祈ってくださいました。「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」。キリストの弟子になるということは、「神に敵対するこの世」から切り離されるということではありません。そもそも、この世界はもともと神さまによって造られたものです。人間が神さまと向き合い、神さまと交わり、神と共に歩む舞台として造られたものです。ですから、「世」の本来の姿というのは、神さまに背を向けている人々の姿ではなく、神さまを信じるキリストの弟子たちの姿こそが、本当の意味での世界の姿と言えるのかもしれません。

もし、その弟子たちが、この世から取り去られたとしたら、どうやって神の恵みを証しすることができるでしょうか。誰がこの福音をこの世に伝えていくのでしょうか。弟子たちには、この大切な使命が与えられているのです。ですから、イエスさまは彼らのために祈るのです。「弟子たちがこの世から取り去られるようになることよりも、守られるように」と祈るのです。

イエスさまがこのように十字架を前にして弟子たちに語り、祈られたのは、「わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるため」です。イエスさまの喜び、それは父なる神さまと一つである喜びです。このイエスさまの喜びが、私たちにも満ちあふれるとしたら、それはどんなに幸いなことでしょう。ヨハネ福音書の 3 章 16 節には「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とあります。この御心こそ、神さまの願いであり、神さまの喜びです。この喜びが満ちあふれるために、父なる神さまは独り子イエスさまをこの世に遣わされました。そして今、イエスさまは、私たちを召し出し、この世へと遣わされるのです。